

## 微積分学統論 II 演習 1

**演習 1.1.**  $f, g : [0, \infty) \rightarrow \mathbb{R}$  は共に連続であるとする。このとき、微分方程式の初期値問題

$$\begin{aligned}\frac{dx}{dt} &= f(t)x + g(t) \\ x(0) &= x_0\end{aligned}$$

の解  $x : [0, \infty) \rightarrow \mathbb{R}$  は  $F(t) = \int_0^t f(s)ds$  とおくととき、

$$x(t) = e^{F(t)}x_0 + \int_0^t e^{F(t)-F(s)}g(s)ds$$

であることを示せ。

**演習 1.2.**  $A = \begin{pmatrix} 2 & 2 \\ 2 & -1 \end{pmatrix}$  とする。

- (1)  $A$  の固有値を求めよ。また、 $P^{-1}AP$  が対角行列となるような正則行列  $P$  を一つ求めよ。
- (2)  $[0, \infty)$  上で微分可能な関数  $x_1(t), x_2(t)$  が任意の  $t > 0$  で

$$\begin{pmatrix} \frac{dx_1}{dt} \\ \frac{dx_2}{dt} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 2 \\ 2 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \quad (1)$$

および  $\begin{pmatrix} x_1(0) \\ x_2(0) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  をみたす。このとき  $x_1(t), x_2(t)$  を求めよ。

ヒント： $\begin{pmatrix} y_1(t) \\ y_2(t) \end{pmatrix} = P^{-1} \begin{pmatrix} x_1(t) \\ x_2(t) \end{pmatrix}$  とおき、 $y_1(t), y_2(t)$  を求める。

**演習 1.3.**  $C([0, 1]) = \{f \mid f : [0, 1] \rightarrow \mathbb{R}, f \text{ は } [0, 1] \text{ 上連続}\}$  とするこのとき、 $f \in C([0, 1])$  に対して、

$$\begin{aligned}|f|_1 &= \int_0^1 |f(x)|dx \\ |f|_\infty &= \max_{x \in [0, 1]} |f(x)|\end{aligned}$$

とおくとき、 $|\cdot|_1, |\cdot|_\infty$  は共に  $C([0, 1])$  のノルムで有ることを示せ。

**演習 1.4.** 2行2列の実行列の全体を  $M_2(\mathbb{R})$  とおく。  $A \in M_2(\mathbb{R})$  に対して、

$$|A| = \sup_{x \in \mathbb{R}^2, x \neq 0} \frac{|Ax|_2}{|x|_2}$$

とおくと、 $|\cdot|$  は  $M_2(\mathbb{R})$  のノルムであることを示せ。さらに、  $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}$  に対して、

$$|A| \leq \sqrt{|a_{11}|^2 + |a_{12}|^2 + |a_{21}|^2 + |a_{22}|^2}$$

が成り立つことを示せ。

ヒント： $(ax + by)^2 \leq (a^2 + b^2)(x^2 + y^2)$  を用いる。

**演習 1.5.** この問題は難しいかもしれませんが、挑戦してみてください。試験には出ません。

$p \geq 1$  とし、  $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^2$  に対して、

$$|x|_p = (|x_1|^p + |x_2|^p)^{1/p}$$

と定義する。 $|\cdot|_p$  は  $\mathbb{R}^2$  のノルムであることを示せ。

解答

1.1

与えられた微分方程式に  $e^{-F(t)}$  を掛けると、

$$\begin{aligned}e^{-F(t)} \frac{dx}{dt} - f(t)e^{-F(t)}x(t) &= e^{-F(t)}g(t) \\ \frac{d}{dt}(e^{-F(t)}x(t)) &= e^{-F(t)}g(t)\end{aligned}$$

0 から  $t$  まで積分すれば、

$$e^{-F(t)}x(t) - x(0) = \int_0^t e^{-F(s)}g(s)ds$$

あとは  $e^{F(t)}$  を掛ければよい。

1.2

(1) 固有値は  $3, -2$ . 固有値  $3$  に属する固有ベクトルの一つは  $\frac{1}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix}$ , 固有値  $-2$  に属する固有ベクトルの一つは  $\frac{1}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \end{pmatrix}$ . 従って

$$P = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & -2 \end{pmatrix}$$

とおけば  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix}$ .

(2)  $\begin{pmatrix} y_1(t) \\ y_2(t) \end{pmatrix} = P^{-1} \begin{pmatrix} x_1(t) \\ x_2(t) \end{pmatrix}$  とおくと、

$$\begin{pmatrix} \frac{dy_1}{dt} \\ \frac{dy_2}{dt} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 0 \\ 0 & -2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \quad (2)$$

従って  $y_1(t) = e^{3t}y_1(0), y_2(t) = e^{-2t}y_2(0)$ . いま、 $y_1(0) = \frac{3}{\sqrt{5}}, y_2(0) = \frac{-1}{\sqrt{5}}$  なので、

$$\begin{pmatrix} x_1(t) \\ x_2(t) \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} y_1(t) \\ y_2(t) \end{pmatrix} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 6e^{3t} - e^{-2t} \\ 3e^{3t} + 2e^{-2t} \end{pmatrix}.$$

## 1.3

$|\cdot|_1$  について： $|f|_1 \geq 0$  は明らか。 $f = 0$  つまり任意の  $x \in [0, 1]$  で  $f(x) = 0$  のとき  $\int_0^1 |f(x)| dx = 0$  より  $|f|_1 = 0$ 。逆に  $|f|_1 = 0$  のとき  $\int_0^1 |f(x)| dx = 0$ 。いまある  $x_* \in [0, 1]$  で  $|f(x_*)| > 0$  とするとき、 $f$  は連続なのである  $\delta > 0$  があって、任意の  $x \in [x_* - \delta, x_* + \delta]$  に対して  $|f(x)| \geq |f(x_*)|/2$  が成り立つ。このとき、

$$|f|_1 = \int_0^1 |f(x)| dx \geq \int_{x_* - \delta}^{x_* + \delta} \frac{|f(x_*)|}{2} dx = |f(x_*)| \delta > 0$$

次に  $\lambda \in \mathbb{R}$  のとき、

$$|\lambda f|_1 = \int_0^1 |\lambda f(x)| dx = |\lambda| \int_0^1 |f(x)| dx = |\lambda| |f|_1.$$

また、 $f, g \in C([0, 1])$  に対して、

$$\begin{aligned} |f + g|_1 &= \int_0^1 |f(x) + g(x)| dx \leq \int_0^1 (|f(x)| + |g(x)|) dx \\ &= \int_0^1 |f(x)| dx + \int_0^1 |g(x)| dx = |f|_1 + |g|_1 \end{aligned}$$

以上より、 $|\cdot|_1$  はノルム。

$|\cdot|_\infty$  について： $|f|_\infty \geq 0$  は明らか。 $f = 0$  なら  $|f|_1 = 0$  も明らか。 $|f|_1 = \max_{x \in [0, 1]} |f(x)| = 0$  とする。このとき任意の  $x \in [0, 1]$  で  $f(x) = 0$  より  $f = 0$ 。次に、 $\lambda \in \mathbb{R}$  に対して、

$$|\lambda f|_1 = \max_{x \in [0, 1]} |\lambda f(x)| = |\lambda| \max_{x \in [0, 1]} |f(x)| = |\lambda| |f|_1.$$

さらに  $f, g \in C([0, 1])$  に対して

$$\begin{aligned} |f + g|_\infty &= \max_{x \in [0, 1]} |f(x) + g(x)| \leq \max_{x \in [0, 1]} (|f(x)| + |g(x)|) \\ &\leq \max_{x \in [0, 1]} |f(x)| + \max_{x \in [0, 1]} |g(x)| = |f|_\infty + |g|_\infty. \end{aligned}$$

以上より  $|\cdot|_\infty$  もノルム。

1.4  $|A| \geq 0$ ,  $A = 0$  ( $A$  が零行列) なら  $|A| = 0$  は明らか。  $|A| = 0$  とする。このとき、任意の  $x \in \mathbb{R}^2$  に対して  $Ax = 0$  である。とくに、 $e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  とおくと  $Ae_1 = Ae_2 = 0$  より  $A = 0$ 。次に、 $\lambda \in \mathbb{R}$  に対して  $|\lambda Ax|_2 = |\lambda| |Ax|_2$  より  $|\lambda A| = |\lambda| |A|$ 。さらに  $A, B \in M_2(\mathbb{R})$  のとき、

$$\begin{aligned} |A + B| &= \sup_{x \in \mathbb{R}^2, x \neq 0} \frac{|(A + B)x|_2}{|x|_2} \leq \sup_{x \in \mathbb{R}^2, x \neq 0} \frac{|Ax|_2 + |Bx|_2}{|x|_2} \\ &\leq \sup_{x \in \mathbb{R}^2, x \neq 0} \frac{|Ax|_2}{|x|_2} + \sup_{x \in \mathbb{R}^2, x \neq 0} \frac{|Bx|_2}{|x|_2} = |A| + |B|. \end{aligned}$$

以上より、 $|\cdot|$  は  $M_2(\mathbb{R})$  のノルムである。

( $M_2(\mathbb{R}) = L(\mathbb{R}^2)$  で有るから、 $|A| = |A|_{L(\mathbb{R}^2)}$  となり、講義でやったことから  $|\cdot|$  がノルムで有ることがわかる。)

ここで、 $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}$ 、 $u = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  とおくと、

$$\begin{aligned} |Au|_2 &= \sqrt{(a_{11}x + a_{12}y)^2 + (a_{21}x + a_{22}y)^2} \\ &\leq \sqrt{(|a_{11}|^2 + |a_{12}|^2)(x^2 + y^2) + (|a_{21}|^2 + |a_{22}|^2)(x^2 + y^2)} \\ &= \sqrt{|a_{11}|^2 + |a_{12}|^2 + |a_{21}|^2 + |a_{22}|^2} \sqrt{x^2 + y^2} \\ &= \sqrt{|a_{11}|^2 + |a_{12}|^2 + |a_{21}|^2 + |a_{22}|^2} |u|_2 \end{aligned}$$

従って、 $|A| \leq \sqrt{|a_{11}|^2 + |a_{12}|^2 + |a_{21}|^2 + |a_{22}|^2}$ 。